

「農と食」 北の大地から

連載第 168 回

農薬や濃厚飼料に依存した酪農を見直す
——根室発「放牧酪農家の考える食と命の会」の試み——

今春、根室管内で放牧酪農に取り組み牛飼いたちが、農薬や除草剤を使わず土を健康に保ち、食の安全性を再考する生産者をめざすグループを立ち上げた。名称は「放牧酪農家の考える食と命の会」で、メンバーは30代から50代までの7人。代表の高橋正明さんは数年前から、海外では遺伝子組み換え(GM)作物とセットで使用されている除草剤「ラウンドアップ」の安全性に疑問を抱き、地元農協の集まりなどで問題提起を続ける一方、自分の牧場の濃厚飼料を非遺伝子組み換えのものに転換。会の仲間たちと一緒に「健康になれる牛乳・牛肉の生産」を模索する。酪農の大規模化が進み、海外産飼料への依存度が高まる別海町で、高橋さんらの取り組みを聞いた。



▲草地更新のために「ラウンドアップ」を散布後、枯れ上がった牧草畑。牧草の播種前に2回、散布を推奨するケースも

▲高橋牧場では5月から、写真の非遺伝子組み換えトウモロコシを毎日、1頭に1キロずつ与える

除草剤とGM作物の危険性を提起 目指す「健康になれる牛乳と牛肉」

GM大豆栽培地の健康被害に
衝撃受け、牛の飼料を換える

酪農が基幹産業になっている根室管内別海町の中西別地区。5月下旬、高橋正明さん(1979年、同町生まれ)の牧場は本格的な放牧シーズンを迎えていた。68ヘクタールの草地で、乳牛65頭(うち成牛50頭弱)を飼う高橋さんは、

濃厚飼料の給与量を控え、適正規模の酪農を営む。この牧場では、生まれてから6カ月経った若牛と親牛と一緒に放牧する。新緑あふれる牧場で人懐っこい牛たちを目にすると、気持ちや和んでくる。牛の主食は草類など繊維質を多く含む粗飼料だが、大方の酪農家は、タンパク質などの栄養素を多く含む濃厚飼料も与える(注)穀物や粕類

など複数の濃厚飼料を混ぜ合わせたものを「配合飼料」という。日本の飼料自給率はきわめて低く、濃厚飼料の約9割は外国産。原材料のトウモロコシや大豆などは、遺伝子組み換え(GM)作物が圧倒的に多い。高橋さんは今年5月、これまで与えてきた配合飼料を使うのを止め、放牧時期は香川県のメーカーから購入した非遺伝子組み換え(ノンGM)

トウモロコシを与えている。冬場は、ホクレン経由でノンGMの配合飼料を購入する予定だ。2年ほど前、GM大豆栽培地のアルゼンチンで散布されている、農薬が原因とみられる深刻な健康被害をフランス人ジャーナリストが追った、ドキュメンタリー「遺伝子組み換え戦争」を見た。大規模農場の大豆畑に隣接する村で、奇形や遺伝子異常



酪農家の3代目として65頭ほどの乳牛を飼う別海町の高橋正明さん。牛に食べさせる配合飼料にアルゼンチン産の遺伝子組み換え(GM)大豆が使われていると知り、最近、飼料を換えた。除草剤の安全性にも疑問を投げかけ、仲間たちとともに「放牧酪農家の考える食と命の会」を立ち上げ、発信を続ける

を持つ子どもが多い実態が映し出され、高橋さんは衝撃を受ける(同作品はユーチューブでも視聴可能)。自分の牧場で与える配合飼料の原材料の一つ・大豆油粕には、アルゼンチン産の大豆が使われていた。「あの村の人たちを不幸にして日本の畜産業は成り立ってきたのに、僕たちはそのことも知らずに幸せな暮らしをしている。誰かを不幸にしてまで、自分たちが幸せになっていいのだろうか……」こんな思いを抱き、同国産の大豆は使いたくなかった。GM作物とセットで使われる除草剤「ラウンドアップ」の危険性について問題提起(後述)を続ける一方、今春、別海町と中標津町の30〜50代の牛飼いの仲間7人で「放牧酪農家の考える食と命の会」を設立し、高橋さんは代表を務める。持続可能な酪農のあり方を模索する毎日が続く。

「ラウンドアップ」を使った草地更新のあり方に問題提起
「ラウンドアップ」は、1970年に米国のモンサント社が開発した除草剤の製品名だ(成分名はグリホサート)。同社は「ラウンドアップ」を散布しても枯れないGM作物を開発し、セットで使われる。使用量は飛躍的に増加し、今では世界で最も多く使用される除草剤になった。ウェブサイトに「有機農業ニュースクリップ」の「グリホサート関連年表」から、最近の動きを見ておく。2015年、WHOの外部機関である国際がん研究機構(IARC)はグリホサートについて、「ヒトに対する発がん性がおそらくある」とするグループ2Aに位置づける論文を発表。欧州を中心に規制を求める声があがった。翌年には、「EU委員会が加盟国にグリホサートの規制強化を求める」イタリア保健省が公園や市街地、学校、医療施設周辺での使用禁止と農業での収穫前の散布禁止を決定」といった動きに発展。昨年暮れには、フランスなどEU加盟6カ国の農業・環境大臣の連名で、EU委員会に段階的禁止計画の策定を要請する書簡を送った。モンサント社は安全性を強調する活動を展開してきたが、グリホサートによる曝露が動物の内臓に及ぼす悪影響について近年、米国や欧州の研究チームが相次いで研究論文を発表している。

10年前に新規就農した、同会メンバーの近津義尊さん(1974年、

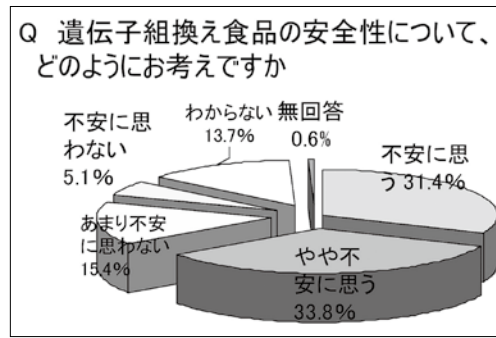
- ①生きものがみんな幸せに
- ②競争ではなく、みんなが幸せに
- ③搾取されず、搾取しすぎない農業
- ④食の安全性を再考する農業生産者
- ⑤健康になれる牛乳・牛肉の生産
- ⑥土壌を健康に保つ(農薬・除草剤の不使用)

「放牧酪農家の考える食と命の会」は、次の「創立理念」を掲げた。

**「食と命」を基本に見据えて
放牧で本来の酪農をめざす**

「放牧酪農家の考える食と命の会」は、次の「創立理念」を掲げた。次「創立案」を掲げた。

内の酪農家(16戸)▽サツラク農協の一部組合員(10戸)▽函館酪農公社に出荷する八雲町の酪農家グループ(7戸)など。全道6千3百戸の酪農家のなかであって、合計40戸余りの少数派といえる。



2011年に道が実施した遺伝子組み換えに関する道民意識調査の結果。回答者の65%がGM食品の安全性を不安視した(出典：道農政部資料)

神戸市生まれは、乳牛60頭ほど(うち成牛40頭)を飼養する。海外生活のあと、上川町内の法人経営の牧場などで実習経験を積み、高橋さんが住む中西別地区に落ち着く。

実習前は、子牛が生まれると乳が出ることを知らなかった、と笑う。マイペース酪農の実践で知られる三友盛行さん(中標津町農協の元組合長)の著書を読み、「こんな酪農なら自分もやれるのでは…」と考え、新規就農をめざし、実現させた。

放牧する夏場、配合飼料は与えない。冬場は1日あたり5キロほど食べさせるが、この量は道内平均の半分以下。生産乳量は少なめだが、放牧酪農でゆとりのある生活を手にし

た。今度の冬から、ホクレンが供給するノンGM配合飼料に換える。「高橋さんは綿密に調べるタイプだけれど、僕はアナログ人間。農業やGM作物の危険性を問いたですことよりも、農業本来の姿から離れてしまった酪農のあり方が問題、と考えています。自分の牧場を本来の姿にしていき、就農希望者にも見てもらおう。そこから少しずつ社会も変わるんじゃないか(近津さん)」

代表の高橋さんは、今年4月の「マイペース酪農年次交流会」で、除草剤の影響やGM作物などについて発表した。質疑のなかでは、「わたしもノンGMの飼料に換えてみたい(十勝管内の酪農家)」

「消費者がもつと知らない、未来の子どもたちにも、今を生きるわたしたちにも影響が出る。講演を頼まれたら、来ていただけるか?」「自給飼料だけで牛飼いをする選択も考えておられるのか?」「僕も配合飼料とビート、パルプ(注1)甜菜の搾り粕)を止めてみた。(年間1頭あたりの)乳量は5千キロですが、人間も牛もすごく楽になった(後志管内の酪農家)」

「わたしもノンGMの飼料に換えてみたい(十勝管内の酪農家)」

「消費者がもつと知らない、未来の子どもたちにも、今を生きるわたしたちにも影響が出る。講演を頼まれたら、来ていただけるか?」「自給飼料だけで牛飼いをする選択も考えておられるのか?」「僕も配合飼料とビート、パルプ(注1)甜菜の搾り粕)を止めてみた。(年間1頭あたりの)乳量は5千キロですが、人間も牛もすごく楽になった(後志管内の酪農家)」

■放牧酪農家の考える食と命の会
別海町中西別179-9 高橋方
☎090・7519・8509



ホームセンターに並ぶ「ラウンドアップ」のジェネリック製品

欧州や米国では「ラウンドアップ」の安全性論争が盛んだが、日本では規制が弱く、マスメディアも情報を十分伝えていない。国内での「ラウンドアップ」の販売権は、日産化学工業が持っている。モンサント社の特許はすでに切れており、さまざまな企業がジェネリックの類似商品を作り、ホームセンターの売り場などにも数多く並ぶ(写真を参照)。大方の消費者は安全性に関する情報を知ることなく、これらの商品を買って求めている。

「わたしの息子は発達障害で、どう育てたらいいのかと考え、本を読んだりしてきました。アメリカの小児科学会の研究報告には「農薬や化学物質の継続摂取が子どもの脳に影響を与えている」と書かれています。」

「わたしは発達障害で、どう育てたらいいのかと考え、本を読んだりしてきました。アメリカの小児科学会の研究報告には「農薬や化学物質の継続摂取が子どもの脳に影響を与えている」と書かれています。」

「わたしは発達障害で、どう育てたらいいのかと考え、本を読んだりしてきました。アメリカの小児科学会の研究報告には「農薬や化学物質の継続摂取が子どもの脳に影響を与えている」と書かれています。」

1番牧草の収穫後、草丈30センチほどに生長させてから除草剤を散布し、半月ほどそのままにする。畑を耕し、草が伸びるのを1〜2カ月待ち、8月下旬の播種前に2回目の散布をする——こうした手法が「一番効果的」と推奨している。

「ラウンドアップ」の安全性に疑問を抱いた高橋さんは当初「自分のところで使わなければいい」と思ったが、勉強を続けるうちに「自分だけの問題で終わらせてはいけない」と考えるようになった。



高橋牧場では、生後6カ月に達した牛を母牛たちと一緒に放牧。生産乳量は少なめだが、適正規の酪農を追求してきた

「わたしは発達障害で、どう育てたらいいのかと考え、本を読んだりしてきました。アメリカの小児科学会の研究報告には「農薬や化学物質の継続摂取が子どもの脳に影響を与えている」と書かれています。」